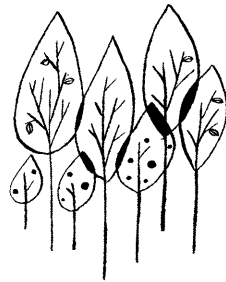


研究発表表(3)

アンリ・ワロン研究の 現状と再評価

亀谷和史



ワロン研究の保育学的意義

私は、これまでフランスの偉大な精神医学者・発達心理学者であり、教育思想家でもあったアンリ・ワロン（一八七九～一九六二年）の研究に取り組んできました。併せて、特に乳幼児保育の実践研究にも多少ともかかわってきました。

かつて保育者との実践研究に参加するようになって、いつも感じていたことがあります。それは、ベテラン保育者が乳幼児の発達の様子を把握したり、実践課題として提起したり、まとめたりする視点や

問題関心が、かつて精神医学者でもあったワロンのそれと、大変親近性をもっているということです。

それもそのはずで、ワロンも、同じ乳幼児や、特に三歳までの乳幼児の発達水準にある「障害児」を臨床的に観察していたからです。ワロンも、その時期の子どもの人格発達そのものを全体的にとらえようとし、「大人とのかかわり方や働きかけ方」の視点から発達や教育の研究をしていたからです。

発達心理学の研究では、今日細かく領域ごとに実験をベースにした実証研究が進展しています。それ自体、貴重な研究成果が蓄積されてきています。しか

し保育の現場では、保育者はいつも子どもたちの発達の〈全体性〉や〈個別性〉が、限られた環境構成や人的物的条件などの中で臨牀的に問われています。だからこそ、ワロンとの親近性もあるのだと思います。たとえば、人や物に注意を向ける際の子どもの表情や姿勢、身体姿勢の感覚（自己受容感覚）、身体表現など、それに対する保育者のかかわり方は、分割できません。常に「今」、「ここ」での状況の中の〈全体性〉と〈個別〉の意味が問われています。

追究されるべき発達観・保育観

ワロンと「論争」を行い、認知発達領域で数多くの研究成果をあげた心理学者としては、スイスのジャン・ピアジェがいます。しかし彼の発達観は、子どもの成熟をかなり前提とした「個体発達」完結型の発達観、あるいは「個体能力主義」的発達観といわれ、批判されてきました。今後、ワロンの視

点、すなわち、個人は「その心性の内奥において本質的に社会的存在」ととらえる視点から、保育実践研究をさらに進めることが、ますます求められるように思います。子どもの発達は、身近な大人との「共同の活動」を行う中にこそ、豊かに保障されるからです。このことが、近年、保育の実践研究からも発達心理学での実証研究からも確認されてきています。

話が飛躍するようですが、実はこのことは、今回の改訂『幼稚園教育要領』及び『保育所保育指針』をどう深めていくのか、そこでの発達観・保育観の問題とも関連しています。すなわち、旧『要領』・『指針』のような新児童中心主義的な成熟説奇りの発達観から脱却し、しかし小学校での教育内容・方法を導入するような、行き過ぎた学習説(Ⅱ「早期教育」容認論)にも陥らない、第三の発達観・保育観、つまり今回の『要領』・『指針』では後退した「協同的な学び」に象徴される発達観・保育観をどう深め、

豊かにしていくか、という課題にもかかわっているように思います。その時期に適切な大人のかかわり方と保育内容こそが、子どもの発達を促すのです。

私は、ワロンの発達論やその研究方法をそのような視点から、再評価していきたいと考えています。

時代に先駆けたアンリ・ワロンの発達観

ワロンは、フランスの戦後教育改革案『ランジュヴァン・ワロンプラン』（一九四七年）をまとめた教育改革者・政治家として知られています。しかし、その研究業績の全容は、まだフランスでも日本でも研究途上です。それは、ワロンが時代に先駆けて、障害児の発達研究・臨床研究を精神医学者として取り組んできたことにもよります。ワロンは一九二〇年代までの研究で、重度から軽度のさまざまな障害児の発達の姿から、普遍的な人格発達理論や発達段階論を提唱しました。その研究成果は、『騒がしい

子ども』という著書にまとめられました。

ここで注目しておきたいことは、LDやADHDなどの発達障害が、まだ全くわかっていなかった一九二〇年代に、「障害のない子どもも障害児もその発達は共通であり、普遍的である」とすでに考えていたことです。そして、障害児の臨床を通して、健常児の発達の姿がより本質的に理解され得る、とすでに考えていました。ワロンの科学的かつ臨床的な発達研究は、精神医学者の時期からの研究の全貌を明らかにし、評価されなければわからないのです。

ワロンの研究業績とその三つの時期区分

ワロンは、リセ(高校)の哲学教授資格を取得後、医学の道に進み精神医学者として出発し、一九〇八年、妄想(パラノイア)の研究で医学学位を取得します。その後、第一次大戦中、軍医として従軍し、その強烈な体験を踏まえて、精神病理の視点から戦後

遺症患者や障害児の臨床研究に取り組むと同時に、心身関係、情動、「前意識」や意識の研究を行います。それらの研究の集大成として『騒がしい子ども—子どもの精神運動発達及び精神発達における段階と障害—』（一九二五年）という大著をまとめます。

これが、ワロンの発達理論研究の一つの到達点でもあり、その後の研究の出発点にもなった大著です。

ここで、ワロンの生涯をかけた研究業績とその時期区分を、一応、次のように三つの時期に仮説的に区分して概観しておきましょう。

第一の時期は、今述べてきた精神医学者であった時代で、『騒がしい子ども』に集大成される初期の時期（一九二〇年代後半まで）です。この時期、障害児の臨床研究から導き出された一般的な発達段階論がすでに提唱されます。それは同時に、理論的には、オーストリアの精神分析学者、ジークムント・フロイトとの批判的対話（意識と「無意識」の関係

をめぐるなど）、ピアジェの「個体能力主義的」な発達論への批判を通して形成されてきたものでもあります。さらに『病理学的心理学』（一九二六年）で、当時の精神病理学研究を概観した後、主に今日の領域でいう発達心理学の研究に進めていきます。

第二の時期は、特に乳児の発達研究に移行し、情動、身体意識、自己意識などに関して研究成果あげた中期の時期（一九三〇年代）です。それは、初期に提示した人格の発達段階を健全な乳幼児において実際に「検証」していったともいえる時期です。

この時期の研究は、『子どもにおける人格の起源』（一九三四年）、『精神生活（フランス百科辞典第八巻）』（一九三八年）などにまとめられ、『子どもの心理学的発達』（一九四一年）に集大成されます。この本では、子どもの心理的発達が大きく感情、運動的行為、認識、人格の四領域にわたって全般的に展開され、ワロン心理学のエッセンスともいう視点・内

容が貫かれています。この書は、フランスで発達心理学を学ぶ学生のテキストとしても長く使われていたことで著名であったそうです。こうして障害児の臨床研究をベースに、第二の時期には乳児期とりわけ三歳前後までの情動、身体意識、自己意識を主題とする多くの発達心理学の分野の研究成果をあげます。

第三の時期は、『行為から思考へ』（一九四二年）

から大著『子どもの思考の起源』（一九四五年）をまとめた後期から晩年の時期です。この時期は、認識・人格機能として「模倣」や「自己意識」の研究を深めるとともに、それらにかかり、さらに思考機能の先駆けにも位置付けられる「表象」がどのように出現するのか、そしてそれが、思考の発達にどのようににかかわっていくのか、癒合的思考形態（synchisme）の具体的な諸相と論理的客観的思考への発展を明らかにしていきます。後期から晩年にかけての第三の時期は、人間の精神発達の全体的プ

ロセスを明らかにしようと構想し、また、おもに幼児から学童期の初めにかけての思考発達の研究が取り組まれたのです。しかしながら、最後の主著である『子どもにおける思考の起源』も、その研究の意義は、ほとんどまだ十分に研究されていません。

ワロンの精神発生研究の構想の現代的意義

ワロンの『行為から思考へ』は、人間の精神発生を比較心理学的に追究した先駆的な研究書です。この書は、単なる心理学説史上の一文獻にとどまるものではありません。しかし、この著書は、初期ワロンの研究との関連や発展の内容が十分に研究されていないために、何がどこまで明らかにされたのか、いまだ評価は定まっていないのが現状です。前期から中期の研究とどう理論的に関連するのか、そこを明らかにすることにこそ、ワロンの乳幼児発達研究の先駆性が秘められているのだと思います。

この『行為から思考へ』の副題が「比較心理学試論」となっているように、今日の発達心理学の研究領域を越え、ほかの動物では不可能な人間固有の認知発達・精神発達が、いつごろどのように創発的に「発生」したのか、生涯をかけてワロンはこのことを明らかにしようとしてきました。それは、①系統発生的側面（類人猿を主とする動物の心理を含んだ人類的側面）、②人類史的側面（原始人・未開民族の心理や哲学の認識論の発展史）、そして③個体発生的側面（子どもの発達心理）、の三つの視点からの比較研究であり、さらにワロンの独創的視点として、精神病理学・精神医学が対象とする病理的心理の比較をも通して、行われているのです。このようにみると、ワロンは、人間の精神発達のありさまを科学的かつ臨床的に解明しようと、多面的な視点から一人取り組んだ、先駆的な研究者であったのです。しかし、ワロンが忘れられかけてい

る今日、このような研究アプローチは、たとえば、アントニオ・R. ダマシオの新たな情動論・自己意識論（『無意識の脳・自己意識の脳』田中三彦訳・講談社、二〇〇三年）や、「共同注意」の研究の進展を踏まえて認知発達の「九か月革命」を主張して注目されている、アメリカの進化人類学者M・トマセロ（『心とことばの起源を探る―文化と認知』大堀壽夫他訳・頸草書房、二〇〇六年）などの研究によって個別にさらに明らかにされてきています。トマセロの自己受容感覚への言及などは、明らかにワロンの影響を受けているといえます。

ワロンの科学的かつ臨床的な研究視点は、子どもを理解していくうえでも、保育実践においても、今ますます求められているといえるでしょう。

（日本福祉大学 子ども発達学部）

*本稿は、第六十回・第六十一回日本保育学会での連続の発表を踏まえてまとめました。